日蓮大聖人御書全集

弥三郎殿御返事

やさぶろうどのごへんじ

新版2082～2085

弥三郎殿御返事

建治3年('77) 8月4日　56歳　弥三郎

これは無智の俗にて候えども、承り候いしに貴く思い進らせ候いしは、法華の第二の巻に「今この三界は」とかや申す文にて候なり。この文の意は、今この日本国は釈迦仏の御領なり。天照太神・八幡大菩薩・神武天皇等の一切の神・国主ならびに万民までも釈迦仏の御所領の内なる上、この仏は我ら衆生に三つの故御坐します大恩の仏なり。一には国主なり、二には師匠なり、三には親父な

り。この三徳を備え給うことは、十方の仏の中にただ釈迦仏ばかりなり。

されば、今の日本国の一切衆生は、たとい釈迦仏にねんごろに仕うること、当時の阿弥陀仏のごとくすとも、また他仏を並べて同じようにもてなし進らせば、大いなる失なり。譬えば、我が主の、しかも智者にて御坐しまさんを、他国の王に思い替えて、日本国にすみながら漢土・高麗の王を重んじて日本国の王におろそかならんをば、この国の大王、いみじと申すものならんや。

いわんや、日本国の諸僧は、一人もなく釈迦如来の御弟子として頭をそり衣を着たり。阿弥陀仏の弟子にはあらぬぞかし。しかるに、釈迦堂・法華堂、画像・木像、法華経一部も持ち候わぬ僧どもが、三徳全く備わり給える釈迦仏をば閣いて、一徳もなき阿弥陀仏を、国こぞりて郷・村・家ごとに人の数よりも多く立てならべ、阿弥陀仏の名号を一向に申して、一日に六万・八万なんどす。打ち見て候ところは、あら貴や貴やと見え候えども、法華経をもって見進らせ候えば、中々、日々に十悪を造る悪人よりも過重

きは、善人なり。

悪人は、いずれの仏にもよりまいらせ候わねば、思い替わる辺もなし。もしまた善人とも成らば、法華経に付き進らすることもや有りなん。日本国の人々は、いかにも阿弥陀仏より釈迦仏、念仏よりも法華経を、重くしたしく心よせに思い進らせぬること難かるべし。されば、この人々は、善人に似て悪人なり。悪人の中には一閻浮提第一の大謗法の者、大闡提の人なり。釈迦仏、この人をば、法華経の二の巻に「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と定めさせ給え

り。

されば、今の日本国の諸僧等は、提婆達多・瞿伽梨尊者にも過ぎたる大悪人なり。また在家の人々は、これらを貴み供養し給う故に、この国、眼前に無間地獄と変じて、諸人、現身に大飢渇・大疫病、先代になき大苦を受くる上、他国より責めらるべし。これはひとえに梵天・帝釈・日月等の御はからいなり。

かかることをば、日本国にはただ日蓮一人ばかり知って、始めは云うべきか云うまじきかとうらおもいけれども、「さ

りとては、いかにすべき。一切衆生の父母たる上、仏の仰せを背くべきか、我が身こそいかようにもならめ」と思って云い出だせしかば、二十余年、所をおわれ、弟子等を殺され、我が身も疵を蒙り、二度まで流され、結句は頸切られんとす。これひとえに、日本国の一切衆生の大苦にあわんを、兼ねて知って歎き候なり。

されば、心あらん人々は「我らがために」と思しめすべし。もし恩を知り心有る人々は、二つ当たらん杖には一つは替わるべきことぞかし。さこそ無からめ、還って怨をな

しなんどせらるることは心得ず候。また在家の人々の、能くも聞きほどかずして、あるいは所を追い、あるいは弟子等を怨まるる心えぬさよ。たとい知らずとも、誤って現の親を敵ぞと思いたがえて、詈り、あるいは打ち殺したらんは、いかに科を免るべき。

この人々は、我があらぎをば知らずして、日蓮があらぎのように思えり。譬えば、物ねたみする女の眼を瞋らかしてとわりをにらむれば、己が気色のうとましきをば知らずして、還って、とわりの眼おそろしと云うがごとし。

これらのことは、ひとえに国主の御尋ねなき故なり。また、いかなれば御尋ねなきぞと申すに、この国の人々、あまり科多くして、一定、今生には他国に責められ、後生には無間地獄に堕つべき悪業の定まりたるが故なりと経文歴々と候いしかば、信じ進らせて候。このことは、各々、たとい我らがごとくなる云うにかいなき者どもを責めおどし、あるいは所を追わせ給い候とも、よも終には只は候わじ。この御房の御心をば、たとい天照太神・正八幡も、よも随えさせ給い候わじ。まして凡夫をや。されば、度々

の大事にもおくする心なく、いよいよ強盛に御坐します
と承り候と、かようのすじに申し給うべし。

さて、その法師物申さば、取り返して、「さて、申しつることは僻事か」と返して、「釈迦仏は親なり師なり主なりと申す文、法華経には候か」と問うて、「有り」と申さば、「さて、阿弥陀仏は御房の親・主・師と申す経文は候か」と責めて、「無し」と云わんずるか、また「有り」と云わんずるか。もし「さる経文有り」と申さば、「御房の父は二人か」と責め給え。また「無し」といわば、「さては、御房は

親をば捨てて、いかに他人をもてなすぞ」と責め給え。その上、法華経は他経には似させ給わねばこそとて、「四十余年」等の文を引かるべし。「即往安楽」の文にかからば、「さて、これにはまずつまり給えることは承伏か」と責めて、「それも」とて、また申すべし。

構えて構えて、所領を惜しみ、妻子を顧み、また人を憑んであやぶむことなかれ。

ただひとえに思い切るべし。今年の世間を鏡とせよ。そこばくの人の死ぬるに、今まで生きて有りつるは、このこ

遭とにあわんためなりけり。これこそ宇治川を渡せし所よ。これこそ勢多を渡せし所よ。名を揚ぐるか、名をくだすかなり。人身は受け難く、法華経は信じ難しとは、これなり。「釈迦・多宝・十方の仏、来集して我が身に入りかわり、我を助け給え」と観念せさせ給うべし。

地頭のもとに召さるることあらば、まずはこの趣を能く能く申さるべく候。恐々謹言。

建治三年丁丑八月四日　　日蓮　花押

弥三郎殿御返事